

対談番組にみられる「中途終了型発話」

表現形式、生起理由、会話のストラテジー

杉山 ますよ

1. はじめに

日本人同士の会話には省略が多い。省略というと主語の省略は日本語の大きな特徴である。省略は主語の省略のみならず、様々なものがあり、場面や文脈によって様々な形式がある。たとえば慣用的な表現になっている「どうぞ」という表現一つとっても、「どうぞ（お入りください）」。「どうぞ（召し上がりください）」というように「どうぞ」は同じでもそこに省略されているものが異なる。回りの学生の話聞いていても、電車にのっている人々の話をちょっと聞いてみても、実に省略現象は様々なものが観察される。対談番組を見ると、「それはどういう状況の…」。「じゃあ、ちょっと」というように途中で切れている発話が非常に多くみられる。発話の終わりが丁寧体や普通体、敬体でもない形式である。本研究は文法的には完結しておらず途中で切れている発話、中途終了型発話がどのような表現形式をもち、どのような場面で出現し、どのような働きをその会話の中で果たしているのかを探る。

2. 先行研究

中途終了型発話という言葉は宇佐美（1995）のスピーチレベルシフトに関する研究の中で使われている。「述部が省略される場合や、複文の場合従属節のみで主節が省略されたりする発話、すなわち最後まで言い切っていない発話を『中途

終了型発話』と呼び、機能としては最後まではっきり言い切らないことによって、言明を避け、発話を緩和したり、相手に発話の機会を与える」としている。

「中途終了型発話」の研究に陳文敏(2000)がある。初対面の二人の会話をデータとし、三種類、六つの表現形式【(1)複文の主節が省略されている発話 ①「テ形」表現 ②「接続詞」表現 ③「条件形」表現 (2)述部が省略されている発話 ①「テ形」表現 ②「接続詞」表現 ③「条件形」表現 (3)形式は「ダ体」発話だが、音声的には「ダ体」と認められない発話】、六つの生起の理由【1. 言語文脈的要因 ①会話の流れへの依存 ②会話参加者にある共通経験、知識への参照 ③「と／って」という表現形式による代用 ④話し相手のあいづちによる中断 2. 心理的要因 ①デス・マス呈示の回避 ②言明の回避】を見出した。

本研究は陳の研究を検証し、表現形式と生起理由と伴に、ゲストとインタビュアーのやり取りの際にみられる会話のストラテジーを探る。

3. 研究方法

3つの対談番組から7つ資料をとり、録画したものを丁寧に文字化しとものを分析資料とした。また補助資料として健康について啓蒙する番組から3つ資料をとった。Aの番組は45分のもので四本、Bはニュース番組の一部で行われる対談であり一本、Cは20分のもので2本である。D補助資料としたものは20分のもので四本である。

なお、非言語も分析の対象とした。

文字化の記号の説明

G : ゲスト

I : インタビュアー

数字 : 発話番号

～ : 長い発話をポイント部分を文字化し、他の省略部分を表す

→ : 中途終了型発話

() : 省略されたと予想される発話

[: 重なり

4. 表現形式と生起理由

以下によく見られる表現形式を上げながら、実例をもとに生起理由も合わせて考察を加える。

4.1 表現形式

4.1.1 複文の主節が省略されている発話

本来、複文は従属節と主節で構成されている。対談番組では非常に多く従属節のみの、つまり主節が省略されている発話が見られた。

「テ形」表現

よく見られるのは「テ形」で終わっているものである。通常「テ形」は付帯状況や、ある動作や作業が終わり、次に移る関係を表したり、原因や理由を述べる言い方に使われる。

例1] →109G : ~だから心おきなく、ワンカップ大関並べて、

→110I : 新幹線の中でその時、いろいろくつろいで…

111G : はい、初めて話したんです。初めての仕事で。 [A]

先行する会話でワンカップ大関を五本飲み、何故そんなに飲んだかの説明をしている話であるので、文脈から「飲んだんです」という言葉がはいるのは予測でき、共通の話題であるのでゲストは省略した。またインタビュアーは「くつろいで」の発話の後に少しポーズを入れ、さらに「いで」の部分でスピードを緩めることにより、そこで一時切れて、次の段階にはいることを相手にさとらせ、あるいはゲストにターンを受けとる機会を示した。そしてインタビュアーは「初めて話したんですね」のようなことを省略し、ゲストはそれを推測したと思われる。これは「はい」という応答により、ゲストがインタビュアーの確認の認めを行ったことにより裏付けされる。

他の部分でゲストとインタビュアーが「テ形」表現で発話をキャッチボールのように受け、渡すという行為をくり返しながらかゲストのストーリーを二人で完成させるやりとりが対談番組では頻繁に観察される。これは二人が視聴者に対して、ストーリーを語っていくというストラテジーをとっているのである。ゲストはインタビュアーが省略した部分は自分のストーリーなので明確に再生できるのであ

る。さらにテ形のみならず、連用形終了を用いたり、短い句などの呈示で中途終了発話を用いて、会話のやり取りがなされることによって、会話がテンポ良く流れ、しかも、気楽に雑談しているような雰囲気を作り出している。またこの現象には共話的⁽¹⁾な会話スタイルも関係していると思われる。

「接続助詞」表現 (し／ので／ながら／けど／が／から／まま等)

対談番組では「けど」「から」が非常に多くみられるので、ここでとりあげる。

例2]→I 045: 今までの役に比べて、変わった役みたいな気がするんですけども…

G 046: そうですね、ただ、竹を割ったような 性格とか、気っ風の良さっていうのは十代の頃に日活の映画でやった感じもあるんですね。

[B]

ゲストは相手がインタビュアーなので「どうですか／どう思いますか」のような表現が省略されていると推測し、応答している。もしインタビュアーが「変わった役ですね」と言明したら、相手に自分の意見を押し付けているような印象をあたえかねないが、そうせずに、「みたいな気がする」の表現で発話を和らげ、「けども」で発話を止めることにより、発話をやわらげている。また自分のコメントが必ずしもゲストにとって納得のいくものかどうか分からないとい懸念もあり、相手の心情を配慮し言明を避けたとも考えられる。

例3]→I 111: ~、これは…上にお花が付いていますが。

[A]

→G 112: これはね、椿の柄なんですけど、椿の花が好きなものですから。

インタビュアーの「~ついていますか」の発話も主節が省略されたものとして、とらえることができる。後には「何か意味がありますか／どうして花の模様がついているのですか」のような質問が省略されていると考えられる。よく日本語の教科書に取り上げられている表現形式だが「~へ行きたいんですが、(どう行けばいいですか／道を教えて下さい)」と言って、道を聞くようなものがあるが、この「が」は逆接というよりは前置きに近いもので、前置きとして次に何か相手に働きかける内容が省略されていたりする。前置きだけで、相手に察してもらう表現形式は日本語には多く、日本語の会話の特徴といってもいいのではないだろうか。ゲストの「~好きなものですから。」はインタビュアーの発話を補充質

問(2)と認識し、補充すべき内容、つまり花の模様をつけている理由のみを述べて、「つけています」は省略している。理由や原因などを答える場合は通常はその部分のみの応答形式をとることが日本語の会話の慣習となっていると言ってもいいだろう。その他「まま、のに、ても」など様々なものが出現しているが、省略されたところにくるものはインタビュアーの発話であれば、確認の質問や補充質問であることが多く、ゲストの発話であれば主節の部分で、すでに先行会話で述べられたことや、二人が共通理解している部分である。

「条件形」表現 (と／たら等)

例4] I 206: レコードの印税っていうのは作詞作曲で、御自分でっていうことになるパーセンテージで入ってくるんですか。

G 207: そうですね。

→ I 208: そうすると…

G 209: 作詞印税作曲印税っていうのが年に2回ぐらい入ってきます。

インタビュアーは印税についての知識がなく、作詞作曲を両方作った場合はどうなるのかという疑問をもつ、当然視聴者も印税については興味があるだろうというインタビュアーとしての意識があり、「そうすると」、つまり「パーセンテージで入ってくるとすると…、(どうなりますか)」という中途終了型発話を用いて、情報の補充をゲストにしている。

高橋(1993)は条件形終了発話が「接続助詞」表現について多く出現すると述べているが、今回のデータではほとんどみられなかった。これは場面や話題の違いによるものなのかどうかはまだ明らかではない。この問題は次回とりくみたい。

4.1.2 述部が省略されている発話

ここでは従続節と主節という関係がなく、述部が省略されているものを取りあげた。

「テ形」表現 (しまう／おく等)

例5] → G 049: ~なんか悪いことしたみたいにな [て(しまった)

I 050: [なんだっていうの。

例6] G050: この間なんか一週間いない時ね、一週間後まで、あれしといて、
キープしといて、回るように、

→ I 051: ご主人が?一週間先きまで全部とれるようにして(おいたんですか)

例5] はインタビュアーの急に入った質問によって発話が切れてしまった。発話の一部に重なりがみられる。例5]、6] ともに補助動詞の部分が省略されていることは文脈から推測される。今回の資料からはみられなかったが、「～みる、くる、いく、ある、いる、もらう、あげる、くれる」などの補助動詞の省略された発話も考えられる。

「引用」表現 (と、という/って、っていう)

陳は「引用」表現を「と/って」で終わるものとし、省略される述部として「思う、考える、言う、話す」などの動詞が考えられるとしている。また森山(2000)は引用は「言う」、「思う」のような発言・思考などを表す動詞と伴に使われるものと述べているが、陳がその他としてあげていた「という/っていう」表現も、本研究では引用表現とみなす。省略された述部として考えられるのは前にあげた動詞の名詞「感じ、考え、話、思い」などに「です/ですね/ですか」がついたものである。

例7]→G141: ~、その時代にもどって、もっと自由な音楽を作ってみよう

→ I 142: なるほど、20年ぐらい前にコンサートをおやりになった時の題が
すでもうシルクロードということで。 [A]

ゲストの発話に、「思いました」のような言葉が省略されていると思われる。これに対してインタビュアーは「なるほど」と応答していることからゲストの発話は完結したものととらえられている。

例8]→I 047: そのために他の方たちとちょっと考えを変えようというために、
別に家元にならなくてもいいのにそういう流派をお作りになった
という…

→G048: そうですね、ひとつのジャンルを作るという意味で。 [A]

これはインタビュアーがゲストした流派を作ったいきさつの長めの話を引用し

て、というよりも要約して、ゲストに確認している、これは次のゲストの「そうですね」という発話からわかる。「話／考えですか」のような言葉が入ると推測されるが、この部分を省略する理由の一つとして考えられることは、インタビュアーがゲストの発話から理解したことが必ずしも当たっているとは限らないということ、また要約した内容がゲストの満足いくものとは限らないのではないかということから、言明を回避したのではないかと思われる。「という」の「と」ぐらいからスピードが落ち、声も若干弱くなる現象、それからインタビュアーのゲストの反応を見るような視線からも伺われる。実際にいくつかのインタビュー番組を観察すると、発話の最後の部分が「という」で終わっている発話が比較的良好に見られる。また「という考えで」で終わっている場合や、「という考えですか」と一応最後まで言っている場合もほとんど「という」以下は聞きずらく、何回も聞かないと聞き取れなかったり、何か言っているのはわかるが聞き取れないことが多かった。一方、場面の異なる討論となると、文末は省略せずに「と思います／と考えます」のような表現のほうが多く出現しているようだ。ゲストの発話で「という」で省略された述部は、大抵インタビュアーから「そうですね／なるほど」というような応答が返ってくることから、当然「感じ、考え、訳です」というような内容が省略されていることが推測される。ゲストは意見や考えなどの一番重要な部分を言い、それに続く述部を省略する。つまり相手の知りたい部分の情報を提供すればいいので省略したのである。これは冗長性を減らすためでもあり、また相手に自分の意見や考えを「～思います」というように明確に言わないことで、発話をやわらげる意図もあるのではないだろうか。このようにゲストとインタビュアーという立場の異なる発話では省略されているものの働きも違ってくる。

「伝聞」表現（～くんです）って／～そうで／～とか）

インタビュアーにとっての既知情報を新しい話題として視聴者に提供するため「ですって」などの表現をもちいる。これによってゲストはターンを貰い受け、話し出す。

例9] [Gはもと水泳の選手、先行会話ではゲストがデザインした水着の話をし

ていた]

→ I 084 : 長崎さんは小さい時は水が怖かったですって。

G085 : ええ、〜〜〜水に顔を背けるタイプの子だったんです。〜[C]

このインタビュアーの発話により今までの水着の話から、オリンピックの水泳選手だった人が水が怖かった話に移行して、それに関するエピソードがいろいろゲストからされている。このようにインタビュアーにとっては既知情報であっても、視聴者にとっては新情報であり、視聴者が興味を持ちそうな話題であれば、それをゲストから引き出すために伝聞表現をストラテジーとしてもちいるのである。「〜そうで」は「ですって」よりもやや堅い印象を与える。「〜とか」は聞いた話ではあるが、内容に自信がない場合に使用の傾向がある。「〜そうですね」、「〜と聞きましたが」というように文末まで明確に言った場合は堅い印象、あるいは改まった印象をあたえるので、その番組の雰囲気や、相手のキャラクターに応じて、また立場に応じてインタビュアー（聞き手）は使い分けている。

「トピック」呈示表現（は、が、って）

例10]→ I 041 : リソウガクのりは（何という字をかくんですか）

G042 : りはさっき言ったイ偏に里で、ソウは演奏の奏、ガクは音楽の楽で、

I 043 : 俚奏楽。

[A]

この表現形式は質問の機能を持っていることが多く、例のように述部に疑問詞をともなう質問、あるいは確認質問が省略されている。また陳が「お名前…」の例をあげているが、その他にも「お住まいは」「お仕事は」のように慣習的になっているものもあり、このような表現形式は「どこにお住まいですか」というように直接的に聞くよりもより高い待遇性をもっているのではないだろうか。

「例示」表現（とか）

陳は二人の話し手が共通の話題「三河弁」について話している際に、一方が「〜とか、〜とか」と三河弁の表現を並べてたて、それに同調するように相手も三河弁の例を付け加えて話す会話をとりあげている。文末まで言わず「〜とか」で省略することで相手との心的距離を縮めることもできるのではないだろうか。

さらに二人での場のストーリーを作りあげていくという共話的な意識もみられる。今回の資料では異なる現象がみられた。

例11] G [もとオリンピックのメダリストで、大学教授]

G251: ～～。逆に他のものを勉強したことによって、水泳に非常に役にたったことがありますね。

→ I 251: それはその発想のとらえ方だとか…

G253: そうですね、まず幅を広げておくことによって、自分のこうやっているエリアがよくわかるようになりますね。 [C]

ゲストは水泳以外のことを勉強することは水泳にとって非常に役に立つというような話をした。それについてインタビュアーは水泳のどんなところに役に立つのかを推測し、ゲストに確認質問していると思われる。それに対して、ゲストは「そうですね」と応答し、それについて詳細に述べている。インタビュアーの推測があったわけである。この「とか」以下で発話を止めたのは推測が当たらない可能性があるので、言明を避けたと思われる。このインタビュアーの発話は「それは水泳のどんなところに役に立ったんですか」と聞くよりも質問が直接的ではなくなり、和らいだ表現となる。

「名詞省略」表現 (Nの／～という／のような)

「～の」以下の名詞省略は非常に頻繁にみうけられる現象で、日本語の初級教科書にもよくとりあげられている。例えば相手が「新しい車を買った」と言えば、「どこの車を買いましたか」と聞き返さず、「どこの／どこのですか」というように、すでに先行発話で言われている「車」を省略して質問し、それに対して「フォードの」というように問題となっている部分のみを答え、後は省略するという応答形式を提出している教科書は多い。このようなやりとりは、けして失礼なものではなく、慣習となっている表現である。次にあげたものは異なった使用である。

例12] I 103: 私のもっていたあれは、胡弓は～～

→ G104: あっ、日本の…

I 105: あ、あれは日本のなんですか。

G106: ええ、あれは日本で改良してこさえたものなんです。 [A]

インタビュアーは自分が持っている胡弓は中国のものだと思っているので、ゲストは訂正した。この場合、「あっ」と小さい声をあげ、注意を引き、さらに「日本の」も小さい声で言われている。「いえ、それは中国ではなく、日本の胡弓です」というように明確に訂正を行うのではなく、間違えた部分を手短かに言う。これはやはり相手を配慮した発話と言えよう。次の例はインタビュアーがもっていない情報を相手から得ようとする試みである。

例13]→I 058 : ~御主人は文化庁の…

G059 : そうそう。海外派遣員という派遣で～ [A]

インタビュアーはゲストの前の主人がドイツに行ったことは知っているが詳細までは知らないので、視聴者に情報を与えるためにこのような発話をした。つまり文化庁が関係していることは知っていたが、その他の情報はもっていなかったもので、分かっている部分を言い、途中で止めることによって、「海外派遣員」という名目で行ったこと、つまり足りない部分の情報が引き出させた。

4.1.3 一部を残し、文または述部を省略

副詞を残して、述部、文を省略

資料で新たに副詞で終わっているものが見られた。これには主語がともなっているもの、また副詞のみの発話も見られた。

例14]→H056 : だから、都会で民謡という言葉を使っただけで、地方の人はあまり…

K056 : なるほどねえ。 [A]

例14] は「あまり」は後に「～ない」をとることはあきらかなことである。さらに文脈で、前に出現している動詞「使う」がきて「使わない」が省略されていることは推測できる。インタビュアーが「なるほどねえ」と相手の説明が終わったものとして、応答している。

例15] K043 : あれ、私、彼どこかで見たことあるわ、TBSで。

→I 044 : あっ、もしかして…

K045 : うん、そりゃそうでしょ、どこかTBSの中でね。(I : そうですね)

歩いてらっしゃることありえるでしょう。

[A]

相手の発話から「もしかして」は省略された部分「彼に会っているかもしれないせね」を推測するのに非常に強い言葉である。この省略はちょっとした感情の高まりによって起こったと思われる。また文脈によって明らかに省略された部分は再生できるので、発話の冗長性を減らしている。

高橋（1993）が森村誠一の「終着駅」という小説からとった例では

「ねえ、死体を土葬にしたのかしら」

「まさか」

というのがあり、これはまさに驚き、意外だという動揺から「まさか」の後の発話は省略されている。

次の例は副詞終了型の発話が続いた会話である。

例16]→G102: じゃあ、おもしろい譜面をちらっと（お見せしましょうか）

→I 103: そうですね。楽譜が、わたし、びっくりしたんですけど。ちょっとちらっと。（見せてください）

→G104: じゃあ、ちらっと。（お見せします）

[A]

G102は楽譜がおもしろい、ちょっと変わった楽譜なので「見せようか」という申し出、I 103は申し出を受けてお願いする発話、G104は意志表明の発話であるが、会話の流れと場面で省略可能であるので、このように中途終了発話が続き、なんの支障もきたさない。ゲストとインタビュアーの会話がりズミカルに流れていく印象がある。

一部呈示表現

理由や手段、場所、時などを表す名詞句の呈示のみ、あるいは名詞のみの呈示で述部あるいは残りの文を省略する現象も多くみられた。

例17] [息子が太っていた時の写真が貼ってある話をインタビュアーは知っている]

I 128: ~今でも貼ってあります↑

G129: それはね、お茶の間に貼ってあるんですが、みんなに見られるところにね。

→ I 130 : 今でも ↑ (貼ってあるんですか)

→ G131 : ええ、今でも [A]

ゲストはG129でインタビュアーの聞きたい部分については答えていないので、インタビュアーは再度、聞きたい部分に焦点を当てて聞き返している。他の部分を省略することによって、ポイントがいつそう際立つ。ゲストも発話の一番重要な部分のみを言い、述部を省略することによって、迅速な応答ができ、時間の節約ともなっている。

4.1.4 形式はダ体発話だが、音声的にはダ体と認められない発話

形式上はダ体発話にみられるが、実際は友人同士の会話や親子の会話にみられるダ体発話とは異なるものが対談にはみられた。これは音調が一般のダ体発話とは違っている。発話の末尾が上昇イントネーションをとまわず、ゆっくり伸ばした発音となり、続くような感じがするものや一旦スピードが落ち、下降イントネーションとなり切れるが、その後続くような感じがするものもあった。

例18] [G : もとオリンピックのメダリスト]

G155 : ~非常にいい経験、やめないで良かったかなあという…そう言う意味で負けても悔しくなかったというか (笑い)

→ I 156 : じゃあ、その後考えても、逆に負けるっていう経験が田口さんにとっては良い経験… (だったんですか/ですね)

G157 : そうです。私にとってはね。 [C]

「~良い経験」の部分の音調は息を「経験」で止めて我慢した後、吐き出す寸前と言う感じである。このように名詞で終わったり、動詞の普通体 (辞書形、ダ形) などで終わる形式も多く出現している。敬語を使っていながら文末をダ体で終わっている。文字化したものを見ると、この例は一見ダ体のように見られるが、実は敬体の役割をしているのである。これは独特の音調をとまなっている。日本語では場面によって、文末まで明確に言い切らないことは相手を配慮するという待遇性をもっており、必ずしも友人や家族同士で交わすような親しさの現れた会話ではない。

4.2 生起理由

上記で表現形式をあげるとともに生起理由もあげてきたが、明確に生起理由を示しきれなかったものもあるので、それらも例をあげて説明を加えながら整理する。

(1) 文脈的要因

- ① 共通知識、体験—会話の参加者が共通してもっているものなので、当然復元でき、省略可能となる。
- ② 会話の流れへの依存—会話を伴にかわしてきたので、共通の文脈をもつことから①と同様に省略可能となる。
- ③ 相手による中断—相手のあいづちや、割り込みにより発話がとられたりして話し手の発話が途切れた場合、
- ④ 話し手の発話能力の不足—不備な情報や途中で話す内容を忘れたことによる終了

(2) 場面的要因

様々な場面により発話の中途終了は起こるが、場面によって出現の頻度や表現形式も異なる。同じ表現形式でも場面によって省略されているものがことなる。対談のような番組は中途終了型発話を使用することにより、リラックスした雰囲気などが感じられ、通常雑談しているようなリズムカルな会話運びができる。日本人の雑談というものは討論や講演会などと異なり、話を一人で続けるというより共話的要素が入り、短かめの発話でターンの受け渡しをくり返すというスタイルをとる。対談と異なる場面をもつ健康について専門家が話し、聞き手（その番組のアナウンサー）が聞くという番組を観察してみると場面の違いが分かる。

例19] I 081 : ~今日は必要なコレステロールについてなんですが、この善玉コレステロールHDLは一体何なんですか。

G 082 : そのHDLっていうのは、まあ、また後でお話しますように、油とタンパク質が一緒になったアポリタンパクというものの一種なんですが、~

アナウンサーは問題となっている物質について医師に質問し、医師が答える。

両者のやりとりは文末まで明確にされ、文末の音調もあまり落ちることはない。これは場面性によるもので、専門的な情報を提供する番組はゲストもインタビュアーも明確な表現形式を用い、質問と答えをくり返しながら、ある病気の原因、その治療方法やならないための対策などを視聴者に提供するというようなスクリプトがある。

(3)文化的慣習

日本人の通常行っている会話では共話的な話し方（水谷1993）をする。共話的な話し方とは必ずしもひとりで話を完結させるのではなく、話し手と聞き手は互いにあるストーリーをキャッチボールのようにターンを入れ代わり二人で作っていくというような考え方にもとずいた形式をとっている。表現形式のところで例があげられなかったので例をここであげておく。

例20]→I 134 : ~さっき合わせてくださったんですが、どんどん音が、

G135 : そうですね、変わりますね。

→I 136 : ええ、変わってきて、

→G137 : 伸び縮みしたり。

相手が省略したところを次の話し手が補い、また省略したところを次の話し手が補い続けていき、話が展開していくというパターンが随所でみられる。

共話的会話がうまくいかない例がみられた。インタビュアーも受け取る意志はあっても、受け取りに失敗、あるいはゲストからの話の投げかけにインタビュアーが気が付かない場合、ゲストは非常に話を続けにくい様子が見受けられた。ゲストがインタビュアーに話を引き受けてもらおうとして、相手の目を見ながら、発話のスピードを落としていき、声も弱めるが、インタビュアーが受け取らない。その結果ポーズが長めになり、結局ゲストは話し続けなければならなくなり、会話の弾みが感じられなかった。この部分は共話が成立しなかったのである。

(4)心理的要因

①相手への配慮—相手にとって直接的な質問は失礼になる。また相手の誤りを訂正する際も明確に誤りを指摘することは相手を傷つけることになりかねないことから、最小限度の指摘を行う。

- ②言明の回避一文末まで明確に言うことは時として、相手に強い印象を与える。相手に質問する際や相手に確認する際、また自分の意見を言う時など発話をやわらげる。
- ③驚きや喜びなどの心理的動揺—驚きや喜びなどにより、それを表現する言葉のみを発し、説明部分が省略された場合など。

5. 会話のストラテジーとしての「中途終了型発話」

4節で表現形式及び生起理由を述べてきたが、ここでは4節でも多少ふれたが、ストラテジーとしての中途終了型発話について述べる。

話を引き出す

これはインタビュアーがゲストから話を引き出す際、またあるトピックについてさらに詳細な情報を得ようとする場合にみられた。インタビュアーが伝聞表現の「ですって」、テ形、名詞省略表現などで発話を止めることにより、トピックを呈示したり、主節を補わせることによって、さらにそれについて話を引き出す働きをする。通常省略はお互いが既に知っていることは言わないことが原則であるが、インタビュアーがゲストから既に聞いて、あるいは事前に調べて知っていることでもゲストに質問するということは真の聞き手は視聴者あり、視聴者にとっては新情報だからである。またゲストがそれについて話しているうちに新たな話に発展することもあり、中途終了型発話は有効なストラテジーである。

発話継続の要請

相手に発話の一部、従統節や主語のみを提示し、発話を止めることは、相手にそれに続く主節や述部などを補う意識を必然的に生じさせることになる。それにより話の継続を間接的に要請することになる。この要請のストラテジーの使用頻度も話の引き出しのストラテジーと同様に顕著にみられた。

聞き手からの援助を得る

4節で「～の」の例で取り上げたように、話し手が話す内容や言葉を忘れて、不確かな情報のため途中で話を継続できなくなった場合、例えば場所やレストランの名前を急に忘れてしまい「あう、ほら、新宿の伊勢丹の…」と言ってやめ

た場合などは相手は代わりにその部分を補おうとし、話を引き取り、説明を継続したり、適切な表現を呈示したり、欠如している情報を補充したりして援助を試みる。これは「～の」に限らず、他の表現形式でもよく見られ、不完全な状態のものを完結させようとする意識の働きによるものでもある。

発話をやわらげる

例12] で述べたように相手の誤りを訂正したり、例13] のように不確かな情報や自分の意見を呈示する際に言明を回避し、発話をやわらげることにより、話し手自身の、あるいは聞き手への心理的負担を軽減する。畠山（1997）は会話をやわらげる技術として「けど」で終わるストラテジーを提出している。

新しいトピックを提出する

「～って／は」の表現形式を用い、相手の発話から興味のある部分を取りあげ、トピックとしてとりあげたり、例19] のように元オリンピック選手に「子供の時に水がこわかったんですって」という表現を用いそれについての話をするように働きかける。

ターンの譲渡

発話が途中で終了、あるいは止まった場合、聞き手は援助を要求されたか、あるいはターンの受け取り可能と認識し、ターンを受け取りやすい。つまり相手の発話中にポーズが生じた場合は、そこがターンの受け取りの適切位置であるからである。インタビュアーが発話を途中でやめるふりをするにより、ゲストにターンを譲るというストラテジーである。

会話の円滑な流れを作る（冗長性の軽減）

聞き手、話し手がお互いに進んで相手の発話を引き取って会話を完結させながら会話をすすめることによって時間が短縮され、会話がスムーズに流れ、冗長性の軽減がはかれる。

雰囲気づくり

中途終了型発話を多用することによって、心理的距離が縮まり、あるいは縮まったような印象を与え、リラックスした雰囲気が作りだせる。しかも相手と共話的に話を交わしているような感じが作りだせ、その場の会話が弾み、円滑に運ばれ

ている印象を与える。4節でも述べたが、専門家とアナウンサーとの専門的知識と啓示をあたえる番組は文末まで両者が言い、しかも文末の音調もスピードも落ちず、声も弱まらない話し方によって、改まった堅い雰囲気をつくりだした。またある場面ではインタビュアーがゲストの発話を引き取らず、うなづきのみで進行していた場面では、ゲストは話を続けにくそうな様子を示し、話がはずんでいるという感じがせず、まるでゲストが講演会で一人で話しているような感じがした。

重要なところを指し示す

発話を訂正したり、聞き返しをする場合などその部分だけを手短かに言うことは発話全体の重要な部分を焦点化し、浮き上がらせるので相手から注意をひくことができる。

以上9つのストラテジーを今回の資料から見い出した。これらはゲスト（話し手）とインタビュアー（聞き手）が行う会話であることから特に顕著に見られたものであるが、通常の会話場面でもみられる会話のストラテジーである。

6. まとめと今後の課題

4節で表現形式と生起理由、5節で会話のストラテジーとしての中途終了型発話を見てきた。表現形式は今回の資料で見られたものをまとめると、4つに分類でき、さらに9つに下位分類できた。生起理由も4つ、さらに心理的要因では3つ、文脈的要因では4つに細分類できた。この中途終了型発話は会話のストラテジーとしての働きもあることが明確になり、今回の資料からは9つ観察された。

この表現形式のときはこの生起理由とか、この会話のストラテジーはこの表現形式というように一対一対応ではない。ある中途終了型発話においては複数の生起理由が関係することもあり、ある表現形式が場面により様々なストラテジーをとる場合もある。また場面やそこに存在する人の立場、役割によっても省略されたり、されなかったりし、また発話されている部分は同じでも省略されているものが異なっていたり、働きも異なることがわかった。今回の資料ではインタビュアーの場合は省略されているものが、相手に対する質問、確認の機能を果たすも

が多く、ゲストの場合は相手に伝える部分の省略が多いことが観察された。今回とりあげた対談という場面では中途終了型発話が多くみられたが、日本人の通常の会話にもこのような発話が頻繁に出現していることが陳の研究からも伺われる。また中途終了型発話は音調もかなり影響していることが明かとなった。

今後の課題としては会話の場面の違うものや親疎関係によるもの、さらに日本語学習者の中途終了型発話の使用の実態も研究としてとりあげる必要を感じた。日本語の教科書では中途終了型発話のみられるが適切な解説や会話のストラテジーとしての説明がまだ十分とはいえないので、本研究が新たな教材、指導の基礎資料になりうればと願う。

(註)

(1)共話：水谷のつくり出した造語

(2)補充質問：南不二男の用いた表現

(3)スクリプト：Schank & Ablesonの提出した概念。ある場面でのプロトタイプのシナリオをスクリプトという。その場に存在する、ある条件をもった聞き手、話し手が共通にもっているもの。

〈用例資料〉

A：徹子の部屋 ゲスト：ミュージシャン、レポーター、演奏家、テレビタレント

B：筑紫哲也NEW23 ゲスト：女優

C：スタジオパーク ゲスト：スポーツ選手 男性、女性

D：今日の健康

〈参考文献〉

宇佐美 まゆみ (1995)「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」

拓殖大学日本語紀要 第5号 p73-87

鈴木 睦 (1989)「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧表現は如何に成り立つか—」日本語学第8巻第2号 明治書院 pp58-67

高橋 太郎 (1993)「省略によってできた述語形式」日本語学vol.12 p18-19

- 陳 文 敏 (2000.) 「日本語母語話者の会話に見られる『中途終了型』発話」
名古屋大学「言葉と文化」創刊号p125-141
- 水 谷 信 子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」日本語学vol.12 p4-10
- 吉 川 千鶴子 (1988) 「場面のスクリプトと省略現象」日本語学vol.7 p64-76